

難病ALSのコミュニケーション 支援装置を作って

全身の筋肉が衰える難病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)。しゃべる能力も失う患者のコミュニケーションを支援する技術者を、宮城県内の患者会が募っている。パソコンとインターネットを利用し自ら発信する患者も増えているが、その操作スイッチ作りは専門技術を要し、ボランティアは現在、たった一人。患者会は近く説明の集いを催し、志ある人の名乗りを待つ。

宮城の患者会呼び掛け

「患者同士で交流した スイッチを用い、今は無い」「パソコンで通信し 波の変化をとらえ音を出したい」。日本ALS協会 出す装置で意思を伝え宮城県支部長の和川次男 さん(五七) 仙台市泉区 。

ALS患者の希望にこがんな思いをかなえた たえ、これらの工夫、改めは十五年前だ。偶然出 良を引き受けてきたのが会ったボランティアの技 同市泉区の坂爪新一さん術者に、わずかに動かせ (五三) 元東北大極低温科 相手の指を使うスイッチ 学センター助教役。 を作ってもらった。 娘さんが脳性マヒであ

筋肉の衰えが進むにつ ったことから「専門知識 れ、和川さんは、まゆげ を生かし重度身障者の意 やまつげのかすかな動き 思伝達を助けよう」と思 を光センサーで感知する い立ち、ボランティア活

後継ボランティア募る集い 22日 仙台

動を続けてきた。脳卒中 医療連絡協議会の助成が 者」と訴えていた。 ALS協会泉支部は、 などの患者も含め、支援 実現したが、活動は年に 先は同県内と一関市内の 百数十日を数え、坂爪さ 「ALSとコミュニケー ション」と銘打つ技術支 病院の約四十人になる。 んは「年齢や体力の問題 援ボランティア募集の集 六年前に同県神経難病 もあり、一日も早く後継 いを二十二日、仙台市内



ALS患者の和川さん夫妻と、コミュニケーションの技術支援をしている坂爪さん(右) 仙台市泉区

がらネットです自立支援を 訴えている患者、家族も 当事者の願いを語る。 「団塊世代が地域に戻り 始めた時。経験や知識 があり、日中に動けると いう人が来てくれれば。 ALSのこと、少しの手 助けで社会につながれる 人たちのことを知ってほ しい」。和川さんの妻は つみさん(五七)は話す。

集いは、仙台市青年文 化センター・エックホー ルで午後1〜4時。応募 の問い合わせ先は、事務 局022(377)25 98(ファクスとも)。